

人間の本質を問う

ー 外国人受け入れの架け橋に ー

Keywords

外国人 移民 難民 グローバル化
偏見 居住 観光地 文化交流



DZ21689 瀬戸 大遙

1. はじめに

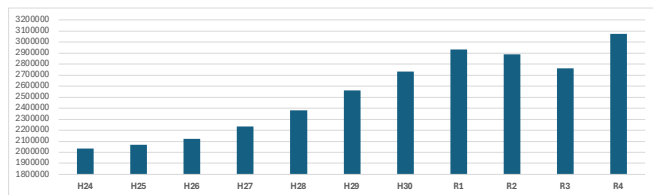
多くの日本人が外国人に対して強い嫌悪や偏見を持つ。外国人は外国人として一括りに認識する、日本人が外国人に抱く潜在意識が要因となっているのではないだろうか。少子高齢化の深刻化、グローバル化へと向かう日本において、外国人が増加することが予想される。外国人との軋轢を緩和できる手立てはないのだろうか。

2. 研究背景

2.1 移民・難民の増加

(1) 在留外国人（移民）受け入れの現状

在留外国人（移民）は一時期減少したが近年また増加傾向にあり、増加率が高くなっている。（表1, 2）



（表1）全国の在留外国人数の推移（単位：人） 出入国管理庁より作成

(1)	永住者	863,936人	(+32,779人)
(2)	技能実習	324,940人	(+48,817人)
(3)	技術・人文知識・国際業務	311,961人	(+37,221人)
(4)	留学	300,638人	(+92,808人)
(5)	特別永住者	288,980人	(-7,436人)

（表2）R4年末 在留資格別在留外国人数 出入国管理庁より作成

労働者不足、グローバル化によって技能実習生、留学生が大幅に増加している。

技能実習制度においては、労働環境がまだ整備されておらず、劣悪な環境や低賃金、コミュニケーション不足などの理由により失踪してしまう人いる。技能実習制度で訪れた外国人は転職が許されていないため、違法な職に就く事案も見受けられる。

(2) 難民受け入れの現状

難民申請も年々増加傾向にあり、増加率も近年高くなっている。だが日本では、難民認定に対して非常に厳格であり、ほとんどの人が棄却されてしまう。

令和5年における難民申請者数は13,823人で、前年に比べ10,052人(約266%)増加。難民と認定した外国人の数は303人であり、多くの外国人が棄却されていることがわかる。

そして、難民条約により命に危険がある場合は自国に送還することが許されていないため、棄却されてしまった外国人も移動や労働の制限を設けた上で日本での滞在を許可している。

2.2 外国人増加に伴う問題点

前章のように外国人は増加の傾向が見られる。それに伴い様々な問題が生じている。日本は政治的な問題により外国人を十分にサポートできていないことから、外国人は同じ国籍の人を頼ることではしか生活をする事ができなくなっている。これにより同じ国籍も人同士のコミュニティが形成されている。地域によってはそれが肥大化し「乗っ取り」という現象が発生している。（例：蕨市、川口市、大久保）そして、メディアで時々報道される外国人による事件により、外国人や外国人が集まる地域を嫌う傾向にある。こうした考えが外国人と関わりを持たないことをさらに加速させ、軋轢が強くなっている現状がある。

3. 研究目的

外国人増加が予測される日本社会において、在留外国人との軋轢が強くなっている理由には、法的整備の不十分。そして日本人には、外国人やあらゆる団体を一括りにし認識し嫌悪する。いわゆる「偏見」が強く根付いていることが関係している。

本研究では人間の本質とも言える「居住」という行為を通すことで異国文化理解、そして人を「個人」として認識し、外国人の受け入れに対する意識改革を促すことを目的としている。

4. 設計概要

4.1. 敷地選定方法

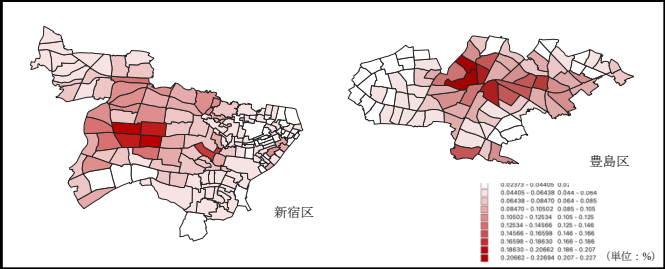
実際に外国人が集まって生活をする地域から共通点・特徴を調査し、設計敷地を選定する。（図1）

共通点として以下のことが挙げられる。

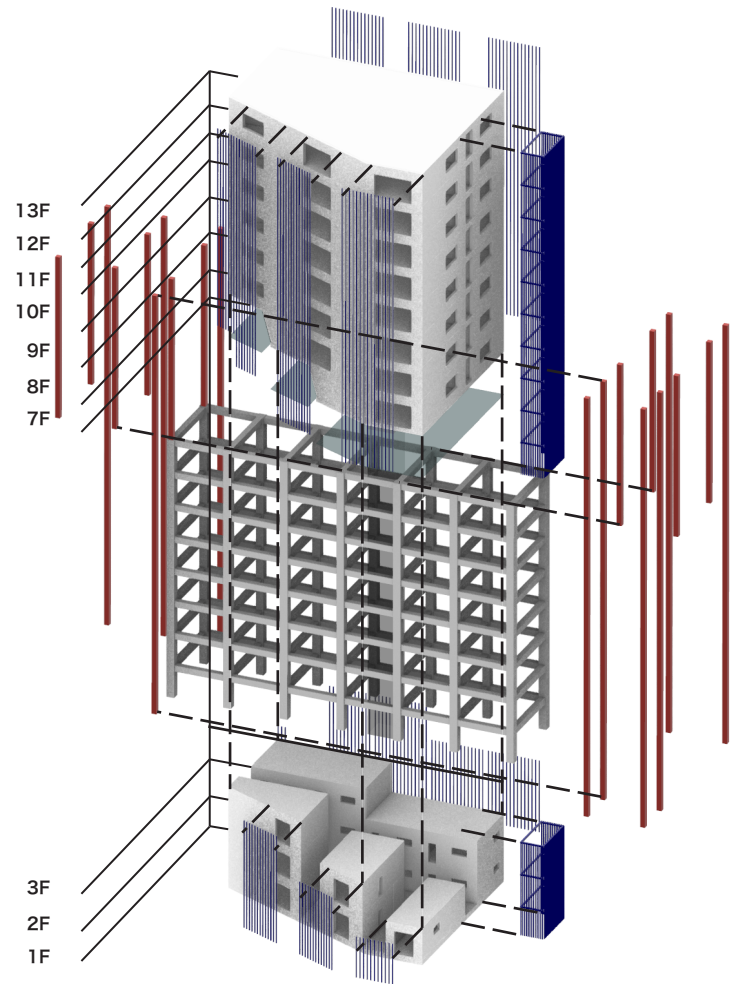
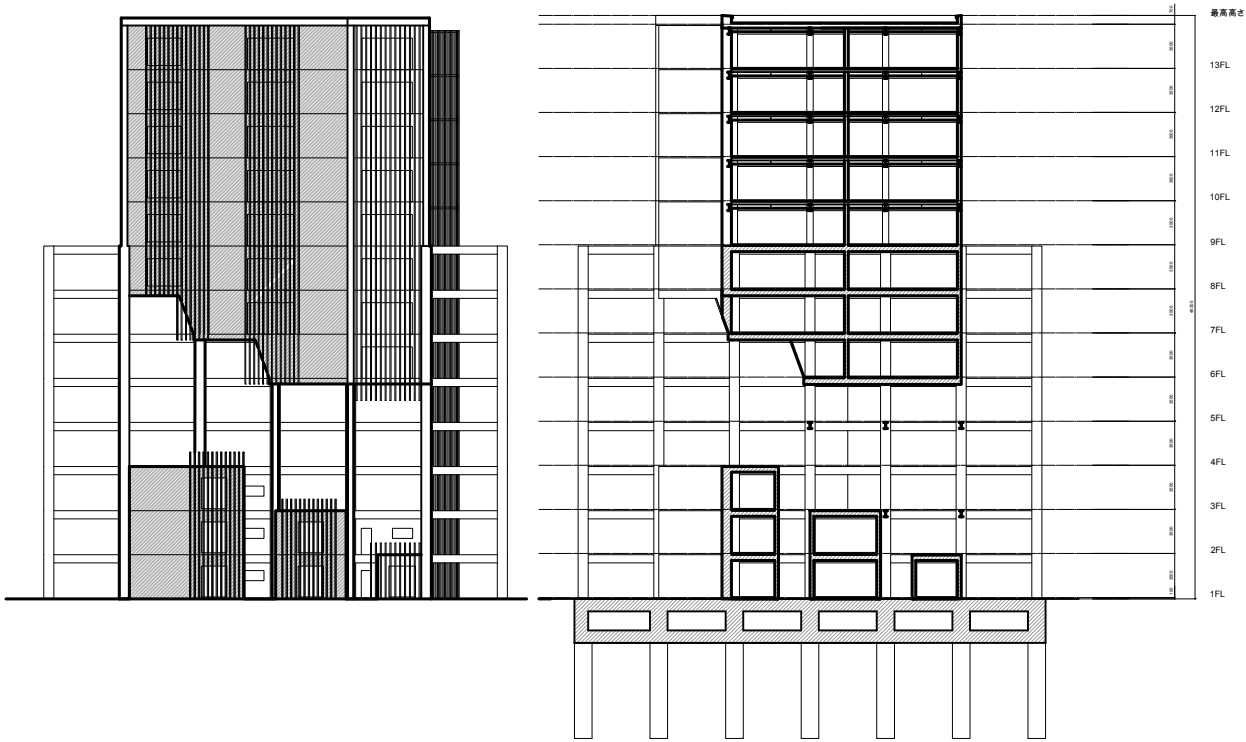
- ① 公共交通機関へのアクセスが良い
- ② 用途地域が商業地域または準工業地域
- ③ 日本人が暮らしたがる場所（線路沿いなど）

④アパートなど集合住宅が集まる場所

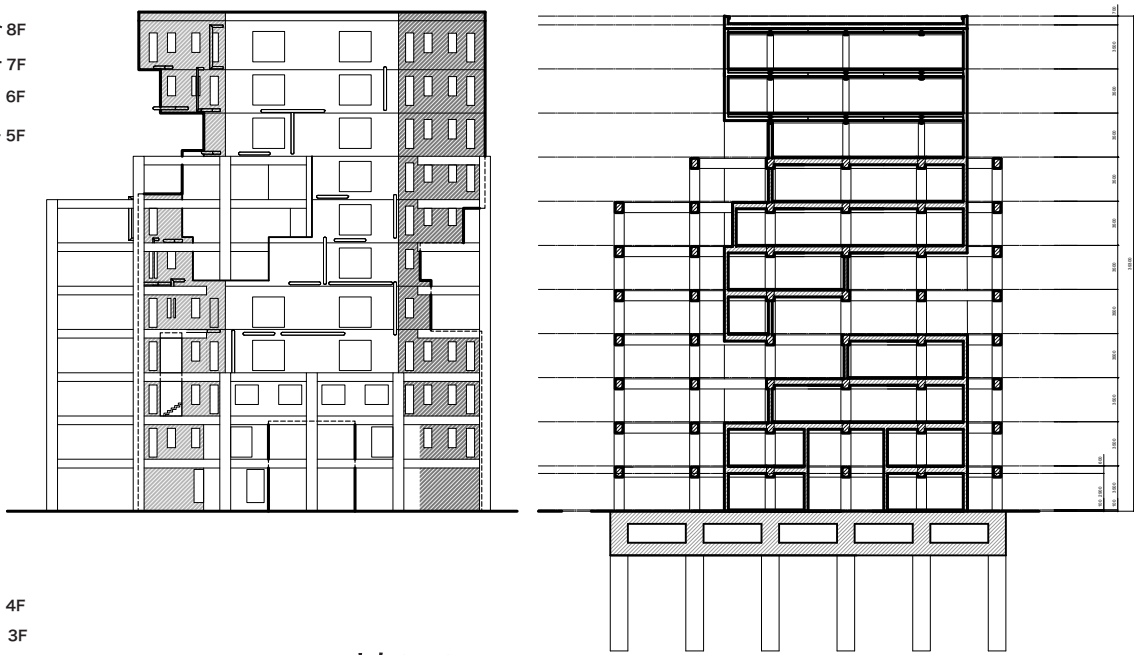
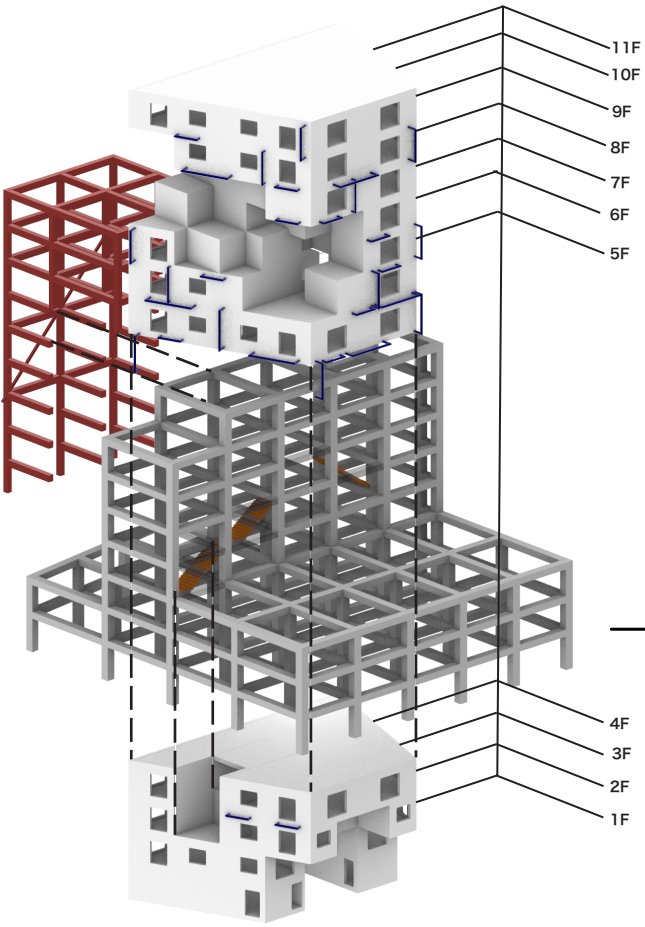
また、本計画では一つの国籍のみではなく、複数の国籍を対象とし、これから増加する外国人は同じ国籍を持つ人を頼り集まってくることが予想されるため、現時点で国籍の分散が計れている場所を選定する（表3）



既存建物の減築を行い、躯体のみを残す。そこに中国・韓国・ネパールの三国が持つ要素を抽出し住居棟を設計する。既存躯体が規律性のあるグリッドとなり、暮らしから滲み出たものをより強調し、周囲から認知されやすくする。



住居棟 1 中国



住居棟 2 韓国

住居棟 3 ネパール

